

特集◆「二上山物語」

古代、二上山は
生活用品を得る
大事な場所だった。

いったい人類が石の道具を使って、それを生活の必需品としたのはいつのころからでしょう。とても興味ある疑問です。人類の歴史は三百万年前以上にさかのぼり、石器の出現も二百万年前より以前といわれます。最初は二、三回打ち欠いただけの簡単なものであった石器は、しだいに精巧で効力のある道具へと発達していきます。

石器の素材の一つ、サヌカイトはガラス質の岩石で、打ち欠くと貝殻のように割れて鋭い刃ができるので、打製石器の原材として用いられました。

このサヌカイトは安山岩の一種で、香川県の旧国名の讃岐にちなんで名付けられています。二上山地域はその代表的な産地で、時期によって違いはありますが、ほぼ近畿地方全域に行き渡っていました。とくに二万年前ごろの旧石器時代には瀬戸内技法という石器づくりの技術を共有していて、いわゆる「二上山文化圏」を形成していたといわれます。

二上山の山麓の鶴峯荘第一地点遺跡からはサヌカイトの採掘坑と見られる掘り込みが発見されています。この遺跡は樟蔭女子短期大学の南の丘陵の先端にありますが、現在は埋めもどされています。

この遺跡の周囲にはサヌカイトの原石をふくむ地層が広がり、採掘坑の中には、多量のサヌカイト製遺物がありました。このような後期旧石器時代までさかのぼる原石採掘坑は世界的にも貴重な発見です。ここでは石器づくりをしたままの状態が残されて、そしてどのようにして人が石器をつくったかがうかがえるのです。

二上山のサヌカイトは、旧石器時代の後も一万年ごろに始まる縄文時代や二千年ごろの弥生時代にもさかんに利用されてきました。穴虫周辺からは石鏃や石匙などともに大量の石片が出土しています。これは石器工房跡ではないかといわれています。また同時に田尻の東側の台地にある桜ヶ丘第一地点遺跡や鶴峯荘第二地点遺跡などからは、縄文土器の破片が見つかっています。

縄文時代の石器は、旧石器時代に比べるとその用途がはっきりしています。矢じりとしての石鏃、切ったり削ったりする石匙、回転させ穴をあける石錐、木の伐採や土を掘った石斧、固い木の実を砕いた石皿と磨石、そして石剣や石棒のような呪術的な道具などがつくられています。それらは表面が磨かれたりして、より加工が進んでいます。

そして弥生時代では、二上山麓は、武器としての石剣や石槍の供給地として重要な場所になってきます。ここではサヌカイト原石の採取から石器の未完成品まで製作して、それを周辺のムラへ運び、ムラで完成品に仕上げられていたようです。

このように二上山麓は旧石器時代から弥生時代までの長い間にわたって、古代人の生活道具としての石器の原産地でもあり、石器づくりの重要な場所であったといえるのです。



いまでいえば、ハイテク用品なのかもしれない、サヌカイトの石器とその原石。

二上山のおだやかな風景は、石器のふるさとのイメージにふさわしく、太古のおもむきが感じられる。



どんずるぼうの奇岩地帯も、一つの石の文化を大和の地に築いたもとであった。

どんづるぼうに 秘められた 石の文化

二上山にはサヌカイトのほかにもう一つ、古代人に利用された石があります。それは二上山の火山活動によってできた凝灰岩です。凝灰岩とは火山灰が固まってできた岩石のことですが、一般には灰だけでなく比較的細かい火山噴出物が固まってできた岩石をいいます。二上山の凝灰岩は島原普賢岳の噴火で知られるようになった火砕流が、厚く積もってきたものです。

凝灰岩は熱に強い性質があり、さらには細工がしやすいところから古くから建築などの材料に利用されています。

二上山の凝灰岩は五世紀ころから死者を葬る石棺に用いられ、六世紀には家形石棺がさかんにつくられて、藤ノ木古墳などの多くの古墳におさめられています。さらには古墳時代の終わりころには、壁画で有名な、あの高松塚古墳や香芝市の平野塚穴山古墳の石椀などにも使われているのです。

二上山から西北に位置する「どんづるぼう」はこの凝灰岩からなる奇岩地帯。標高一五〇メートルですが、松などの常緑樹の間に山肌が白くむきだしになって輝いています。これを遠くから見ると、たくさん鶴がたむろしているように見えるところから、どんづるぼう（屯鶴峯）と呼ばれるようになりました。したがって、このどんづるぼうは二上山の凝灰岩を迫力ある姿で見ることが出来る場所なのです。そしてこの付近には、古代人が凝灰岩を切り出した、石切り場の跡が残されています。

ノミの音が 聞こえてきそうな 石切り場。

「どんづるほう」から国道一六五号を西へと向かい、右手の丘陵へと続く道を入ると、小さな表示があります。右側の高台に登ると、穴虫石切り場遺跡です。凝灰岩を切り出し、石材を各地の古墳や寺院に送り出していた場所。方形に石を切り出した跡が見られます。

風化した岩肌に残されたノミの跡が時代を越えて、見るものの心をとらえます。今まさにそこに古代人たちがいて、力をふるってノミを使っているような錯覚におちいります。カンカンとノミで岩を切りくずしている音が、辺りの静かな木々を震わせて聞こえてきそう。このような凝灰岩の石切り場は、この穴虫付近から十カ所ほど発見されています。

二上山の凝灰岩は、古墳時代には石棺に使われましたが、飛鳥時代から平安時代にかけては、寺院の建築材に多く用いられ、斑鳩町の法隆寺など多くの寺院の金堂や塔、講堂などの基壇や礎石、鹿谷寺跡の十三重塔、当麻寺の石灯籠などがつくられています。

鎌倉時代になると中国からの石工たちによって、花崗岩を用いるようになったこともあり、石塔、石仏、墓標、狛犬、鳥居などの多くの石造物がつくられています。さらに室町時代になって、庶民によって素朴な小型の石仏や五輪塔が数多くつくられ、石仏とともに民間信仰が高まって、石に文化が栄えました。香芝市周辺には、二上山の凝灰岩を使って、室町時代につくられた石仏が多数残されています。その中でも畑の志満堂の石仏を寛正三年（一四六二）の銘があり、最古のものといわれています。

凝灰岩を切り出した跡からは、遠い時代にもかかわらず、活気あふれる雰囲気伝わってきそうである。

二上山からの 贈り物。

コケの緑色と白い砂、むらうさに置かれたような石、そして暗い赤色の砂。当麻町にある当麻寺奥の院の庭園は、いわゆる枯山水と呼ばれるものです。この庭園の中に見える少し暗いような赤色の砂が金剛砂。これほど大量の金剛砂を見ることが余りないと思われます。それもそのはず、これは香芝市の金剛砂を用いた磁業会社の社長さんが寄付した、残り少ない香芝市産出ものなのです。

金剛砂は普通にはサンドペーパーや研磨材に用いられています。それは金剛砂の硬度が六・五〜七・五と非常に硬い性質を利用しているのです。ちなみに私たちが最も硬いと思っているダイヤモンドは硬度十なのです。

二上山の金剛砂は鉄分が多い鉄燦ザクロ石の一種。今から約二千万年前に始まった二上山の火山活動に伴う熔岩の噴出で出来た石切場火山岩（シソ輝石ザクロ石黒雲母デイサナイト）にふくまれたザクロ石が長い年月の風化作用によって、流失して低地に堆積したものです。したがって二上山が生み出してくれた、私たち人類への贈り物からといえるでしょう。

この金剛砂が産出されたのは、香芝市内では、竹田川に沿った穴虫から逢坂にかけての地域が主でした。また二上山の向こう側になる大阪府側では、太子町の飛鳥川流域が中心でした。「でした」と過去形なのは、実はもう香芝市や太子町では、産出されていないからです。現在も金剛砂を用いた製品は作られています。それは中国からなどの輸入原料に頼っていることです。

したがって、当麻寺奥の院庭園に敷き詰められた金剛砂は貴重な香芝産のミニユメントということになります。

当麻寺の奥の院にある風雅な庭園には、金剛砂が用いられ、そこには重要な意味が込められているという。





金剛砂は、宝石の輝きをその小さな粒に秘めて、あくまでも何げない深い紅色をしている。

これが 金剛砂だ。

金剛砂はザクロ石の一種です。ザクロ石の中にはガーネットと呼ばれ、六月の誕生石の宝石として有名なものがあります。深い紅色、暗い赤色が特徴の美しい石です。

二上山の金剛砂は石切場火山岩が風化流失し堆積した地層にふくまれています。それが竹田川などの川底に集まり、かつてはこれをすくい取っていたのでした。したがって、金剛砂の利用はずいぶん昔からと考えられています。すでに「続日本紀」(天平十五年九月十三日)に、その記述が見られます。平安時代には御所の敷砂に、江戸時代には化粧壁に用いられています。また水品やメノウなどの研磨材に使われたということです。

しかし、それが産業として確立され、全国的に知られるようになったのは、明治時代から。穴虫出身の金剛砂王と呼ばれた安川亀太郎氏が全国に販路を広げて後、明治時代の終わりから大正時代にかけて、金剛砂を原料とする研磨布紙(サンドペーパー)産業がおこったのでした。そして二上山の金剛砂は研磨材として全国の九〇%を占めたのです。

現在、地下に埋蔵されていた金剛砂は資源として枯渇してしまっており、輸入ものが用いられるようになってきました。その活用もネクタイピンなどの装飾品や陶器のうわぐすりなどの新しいものが考えられています。

手にすると、さらさらとこぼれていく金剛砂のその感触、そして太古を思わせる深い赤色。水にぬれるとしっかりとした色合いに、美しい輝きが加わります。この二上山が贈ってくれた金剛砂のことをいつまでも忘れずに、私たちの記憶にとどめておきたいものです。